【参考資料】

第３回京都府教育振興プラン改定に係る検討会議概要

１　日　時

令和２年８月12日（水）13時30分～15時30分

２　場　所

京都産業大学むすびわざ館３階　３－Ａ教室

３　出席者

委　員　原座長、青山委員、大野委員、岸本委員、佐藤委員、中山委員、村田委員
府教委　橋本教育長、前川教育次長、山本教育監、大路管理部長、山口指導部長　他

４　内　容

新しい「京都府教育振興プラン」第１次素案について

【次　第】
・教育長あいさつ
・事務局からの説明
・意見交換・協議
　新しい「京都府教育振興プラン」第１次素案について

５　資　料

資料１　　配席図
資料２－１　新しい「京都府教育振興プラン」第１次素案
資料２－２　推進方策及び主要方策の新旧対照表
資料３　　今後の検討会議の進め方

＝＝詳　　細＝＝＝

■橋本教育長あいさつ

皆様におかれましては、御多忙のところ御出席賜りまして、誠にありがとうございます。
さて、前回７月の会議の時点で、新型コロナウイルスの感染は再び拡大の兆しを見せておりました。その後、京都府内でも毎日のように児童生徒や教職員が PCR 検査を受けるようになり、７月19日には児童生徒の感染が判明し、その後も何件かの報告が挙がっているところです。
現在、学校は短い夏休みに入り少しほっとしたところですが、児童生徒や教職員の感染が判明した場合、校内の消毒や濃厚接触者の確認作業のため、１日から３日間程度、補習や部活動などの教育活動を休止し、その後は感染が拡大していない限り、速やかに教育活動を再開する対応としています。先日の文部科学省の発表によると、６月の学校再開後の児童生徒の感染は、大半が家庭内感染によるもので、校内感染は５％以内にとどまっているとのことです。学校はかなり密な環境ですが、思っているよりは校内の感染リスクは小さく、また、子どもは無症状や軽症の場合が多いようです。そのような中で、今後はできるだけ学校の学びを止めない対応、新型コロナウイルスと共存していく対応が、全国的にも定着していくものと考えます。
本日の会議も、佐藤委員、中山委員、村田委員の３名がリモートでの御参加となります。学校現場がＩＣＴの活用に取り組んできたように、我々行政も新しい仕事の様式に挑んでいかなければならないと感じているところです。

さて、本日は、振興プランの第１次素案を御協議いただきます。先月の会議では、基本理念や施策推進の視点の骨子案について様々な御意見をいただきましたので、必要な修正を行うとともに、その詳しい内容について、文章での書き込みを行いました。今後の教育改革にかける府教委の決意や、今後も引き続き大切にしていきたい部分について盛り込んでいるところです。また、６つの推進方策をさらに細かく区分し、今後取り組む施策の方向性をお示ししておりますので、引き続き御意見を賜れば幸いです。本日はよろしくお願い申し上げます。

■事務局からの説明
石澤総務企画課長から資料２－１により説明

■意見交換・協議
＜目指す人間像とはぐくみたい力＞
○骨子案では少しきつい表現に感じた内容も、しっかり本質を残しながら適切に表現できており評価できる。
○どのような状況にあっても、「子どもたちが前を向いて進んでいける力をはぐくんでいこう」という強い思いが滲み出ており、全体として違和感は無い。
○一つ一つの表現を見るとそうではないと理解できるが、読み手によっては、オールマイティな人間を求めていると受け取ってしまうことを危惧する。
○はぐくみたい力については、それぞれが三つ巴になった表現になっている。「主体的に学び考える力」は姿勢、「多様な人とつながる力」は連帯、「新たな価値を生み出す力」は尊厳にも触れている印象があり非常に良い。
○ＡＩだからこそできること、ＡＩにアシストしてもらいながらできること、人間がやること、人間しかできないことを分けて考えられるようになることも、ＩＣＴの活用やプログラミング教育などに加えて、Society5.0 時代において目指すべきことの一つである。

＜教育に関わる全ての者が大切にしたい想い＞
○とてもわかりやすい表現で、保護者が読んでも十分に内容が理解できる。特に、「誰もが『包み込まれているという感覚』と『自己肯定感』を持てる環境の中で成長することが必要」という表現はとても心強く感じており、その環境をどのように整えていくのかが大切である。
○学校・家庭・地域が一体となって子どもを支えるためには、三者間の信頼関係が重要であり、その点についても盛り込んでいただきたい。
○全体としては非常に良い文章である。中ほどに「何度失敗してもへこたれず再び挑戦できる」とあるが、「何度失敗しても再び挑戦できる」ことは非常に重要である一方、「へこたれてはいけないか」についてはいろいろな捉え方がある。へこんでは駄目ということではなく、「何度失敗しても再び挑戦できる」としても文意は伝わるのではないか。
○自己肯定感はよく使われる言葉であるが、存在レベルの自己受容的な自己肯定感なのか、自尊感情的な自己肯定感なのかで意味合いが変わってくるため、きちんと定義してから用いないと解釈が揺れてしまう。

＜施策推進の視点＞
○「画一的で没個性的とされがちな学校教育」とあるが、個性とはそれぞれの人間が持っているもので、凸凹があって良い。凸の分を伸ばして、凹みすぎている部分を何とかして埋める。凸凹は人によって違うが、それを見抜ける教師や教育が必要とされているのではないか。
○「没個性的」という表現は、誰にでもわかりやすい表現にしたいとの意図でこの言葉を選んだのかもしれないが、計画を作る行政側の立場からすると違和感がある。
○学校教育の一つの評価の視点として盛り込むことは、個人的にはひっかかりはなく、むしろ攻めているという印象で評価している。
○「教員のコーディネート力」は、非常に重い言葉である。「教員のコーディネート力」が抽象的な言葉にならないよう、しっかり施策に反映させる必要がある。
○教育には、持てる力を向上させるという側面がある一方で、その人らしさをどう認めていくかということも、多様性とは非常に関連がある。「子どもたちの多様な個性と能力、子どもたちを取り巻く・・・」とあるが、例えば「子どもたちの多様な個性と能力を“尊重し”、

・・・」とするなど、一言挟むだけで印象が変わる。何かを向上させることは重要だが、「あなた自身、そのままでも良いのだ」と肯定されるニュアンスが入ると良い。

○説明文に「全ての子どもが、『目指す人間像』に掲げるように心身ともに健全に成長し」とあるが、「目指す人間像」に「心身ともに健全に成長し」に対応する表現がないため、違和感がある。

○「障害のある子どもが将来の自立を見据えて学び」という表現では、他の子どもについて言及されていない。そのため、障害のある子どもは、多くの子どもたちに比べて特に自立できていない、あるいはそれが難しいという状況があるので敢えて目指す必要があるという意味に取れるため、例えば「障害の有無に関わらず」という表現にしてはどうか。

○説明文の「誰一人取り残すことのない教育を進める」の対象が、前半の内容のどこまでを含んでいるのかがわかりにくい。

○視点の２つ目に「校種等を越えて切れ目なく」とあるが、ＩＣＴについては校種ごとの意識差が激しく、切れ目のない教育を展開できるのか疑問である。子どもたちの交流はもちろん、教員の連携を施策の中に位置付けていく必要がある。

○保護者は、自分の子どもが高校を卒業して大学生になっても就職しても、何歳になろうがその子の将来について気になるものである。卒業後、大きな壁にぶつかったときに、もう一度手を差し伸べてあげられるよう、府立学校が大学や企業と連携して、卒業生の状況を把握できる仕組みができないか。また、退職教員の力も活用しながら子どもたちの真に生きる力を伸ばしていただきたい。

○生涯学習や社会教育の視点の書き込みがさらにあれば、保護者としても、子どもが社会に出るまでは、学校と連携して学びを深め、振り返りの機会が得られるという安心感につながるのではないか。

＜取り組む施策の方向性＞

○現行プランの 10 の重点目標を新プランでは６つの推進方策として整理しており、非常に見やすい区分となった。

○現行プランでは 40 ある小見出しが、新プランでは 28 まで減らされたということで、かなり大きく括り再編成されている。足りない項目等があるかのチェックが重要である。

○推進方策１(1)(2)(3)の小見出しについては、新学習指導要領に対応した表記になっているが、書きぶりのバランスとしては少し違和感がある。

○推進方策３「豊かな人間性の育成と多様性の尊重」の各項目が、全体の中では限定的なものが多い印象がある。

○推進方策３の(13)「いじめや暴力行為の防止対策の充実」と(15)「不登校児童生徒に対する学びの保障」は続けて置いた方が良い。

○多様性のある子どもたちをどのように教育していくかについては、学校や教員を主体に進めるだけでなく、子どもたち同士がそれぞれの多様性を尊重し合えることに結びつく項目があっても良いのではないか。例えば、人権教育については教員の研修があげられているが、生徒同士が理解し合える環境をどのように作っていくのかについても記載してはどうか。